

ICTを活用した教育体制構築に関する実証事業 報告書

1. 学校名
在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人会日本人学校
2. テーマ
ICT活用を核とした New Normal School(NNS)のかたち ～ 新たな未来を拓く子どもの育成 ～
3. 取組の概要
(※報告書の内容を要約し、200～400字程度で記載してください。)
<p>今までとは異なる生活様式の中で、学校の在り方・学習の在り方もその変化に対応していく必要がある。そこで、学校での対面学習とオンライン学習を組み合わせ、より良い教育を行うことを目指し、本事業に取り組んできた。今年度のほとんどがオンライン学習(1月末現在、今年度の登校日は46日間)という状況の中で、様々な実践を行い、ICTを「使用する」から「活用する」ところへと高まってきている。Google classroomでの課題配信、zoom授業はもちろん、オンラインでの児童委員会や生徒会活動、現地校との国際交流(小学部5年)も実施することができた。主な成果と課題は以下の通りである。</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の学習を止めることなく、質の高い学習を保障することができた。 ・休校中も児童生徒の学習意欲を高めることができた(保護者アンケートより)。 ・課題・提出物の管理が容易で、児童生徒一人ひとりの学びや成長を把握して評価することができた。 ・反転学習によって、より深い学習ができた。 ・児童生徒が主体的に、児童委員会・生徒会活動に取り組んだ。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目の疲れ、視力低下の懸念。 ・知識及び技能の見取りが難しい。 ・基礎学力をしっかり定着させるための手立て。 ・オンライン授業では、隣の席の人と少し話し合うというような交流がスムーズにできない。 ・自立した学習者でなければ、反転学習の実現が難しい。
4. 取組の背景・目的
(※非常時でも途切れない「学びの保障」の在り方と関連づけて記述してください。)
<p>毎日学校に登校することが当たり前であり、教科学習や特別活動、様々な行事を友人らと関わり合い過ごしていた児童生徒たちであったが、新型コロナウイルスをめぐる社会情勢から、毎日登校することや、例年の行事・活動を行うことなどの、当たり前の活動が当たり前に出来ない状況へと変化した。</p> <p>そこで、本校では、ICT活用を核とした教育実践を行うことで、ニューノーマルスクール(NNS)のかたちを提案していこうと考えた。学校へ登校した際の授業と、自宅でのオンライン学習の両輪で、学習保障をするシステムを構築するということである。本校では以前よりG-suiteを整備していたが、Googleクラスルームでの教材提供や、Zoomを使ったリアルタイム授業をさらに充実させていこうと計画した。さらに、教科指導だけではなく、特別活動、国際交流などあらゆる活動においてオンライン学習を進めていった。</p> <p>以上の実践を積み重ねることで、自分自身で学習方法を工夫し自立した学習に取り組める児童生徒、興味があることをとことん追究し、常に学び続ける児童生徒、他者との新たなコミュニケーション力を高める児童生徒、ICTリテラシーを高めIT社会で活躍する児童生徒など、新たな未来を切り拓く力を身につけた児童生徒を</p>

育成することができると考え、本事業の取組を実施することとした。

5. 取組の実施日程

日程	取組内容
4月	3月から続く行動制限令のため、新学期から休校となる。以前より整備していた G-suite を活用し、Google classroom で学習課題に取り組めるよう支援を行う。
5・6月	Classroom での学習支援とともに、zoom でのリアルタイム授業を導入する。また、児童生徒のメンタルケアのため、保健相談のできるオンライン保健室を導入する。
7月	7月16日より行動制限令が緩和され、分散登校を経て、7月30日から一斉登校となる。学校での対面授業を実施するとともに、日本への一時帰国中の児童生徒のために Google meet で授業の様子をリアルタイム配信する。入国できず日本待機中の新派遣教員による zoom 授業は継続する。 オンライン学習の効果的な取り組みについての研修会を実施する。
8・9月	学校での対面学習と、新派遣教員による zoom 授業を継続。反転学習を一部導入する。 9月15日、zoom にて小学部5年生が現地校との国際交流会を実施する。
10月	行動制限令が強化され、新派遣教員が入国、ホテル隔離期間中である10月12日からの休校が決まる。再び、Classroom と zoom を活用したオンライン学習となる。
11月	Zoom にて、宮城教育大学 安藤明伸教授を講師としたオンライン学習研修会を実施する。また、一人一台のデバイスを使った授業作りについての研修会も実施する。 保護者アンケートを実施する。
12月	反転学習についての研修会を実施する。中学部に無学年式オンライン教材「すらら」を導入する。
1月	児童アンケート・教員アンケートを実施する。 行動制限令が緩和され3学期始業式より4日間学校再開となる。その後再び行動制限令が強化され、休校となる。
2月	より良い反転学習のための研修会を実施する。 成果の確認、今後の方針を検討する。

6. 具体的な取組内容 (※詳細に記載し、付属資料があれば添付してください。)

【Google classroom による学習課題配信】

毎日の課題を classroom で配信した。学習プリントやスライドなどを配付する方法、授業動画を You tube に投稿してそれを配信する方法、zoom の URL を添付してリアルタイム授業を行う方法など様々なやり方ができる。学習後には児童生徒がノートの写真を提出したり、ドキュメントやスライドを添付して提出したりして、その一つ一つを確認して評価することができる。

【Zoom によるリアルタイム授業】

Classroom に授業の URL を貼り付け、時間になったら児童生徒が入室し、オンライン授業を行った。慣れないうちは児童生徒の負担を考慮し、1日に zoom は2時間程度としていた。徐々に zoom の割合を増やし、年度後半には zoom 授業を基本とするようになった。ブレイクアウトセッションを使ったり、書き込む機能を使ったりして、双方向の学習となるよう工夫して行った。ただ、特別な機器や教材が必要な実技科目については、単元によって学習が困難なものがあり、オンラインだけでは限界も感じる。

【zoom 国際交流会】

行動制限令の規定、本校の登校・休校期間、相手校の都合など、さまざまな条件もと、今年度実施できたの

は小学部 5 年生のみとなった。例年、現地校を訪ねたり日本人学校へ招いたりして、互いの生活や文化を紹介し合う活動を行っていたが、zoom での交流を行った。音声混線、直接会って接していないことによる見えない壁など難しい面もあったが、ねらいに沿って学習することはできた。行動制限令によっては今後も交流の難しさがあるが、学習のねらいを忘れずに計画していきたい。

【反転学習】

学校と家庭の WiFi 環境、iPad や chromebook 貸し出しによる一人一台のデバイス、G-suite による課題管理、児童生徒のオンライン学習の習慣により、反転学習と取り入れられるようになった。前日までに基礎知識についてのプリント・資料・動画を事前配信し、児童生徒はまず家庭学習した。それをもとに授業を行うことで、交流の時間をたくさん取ることができたり、より深い学習をしたりすることができた。事前配信する資料や動画については、適切に取り扱う必要がある。ねらいに沿って自作したり、web 上のものを使う際には著作権に注意したりした。また、動画の場合は 10 分以内とする、前時のうちに授業で事前配信する旨を予告する、前日 17 時まで配信するなどガイドラインも策定した。一方、反転学習は自立した学習者でなければ難しいという課題もある。事前配信を見ていない児童生徒への支援や、保護者への働きかけも重要である。

【その他】

授業以外にも、学習支援やメンタルケア、関わりをつくる場面で zoom を活用した。

「朝の会」: 単に連絡の場としてだけでなく、児童の様子を見たり、教師と児童のつながりや児童同士のつながりを作ったり、係の活動を行ったりした。

「オンライン保健室」: 月水金の朝に体温や状態を確認するアンケートを行った。悩みを書いたり、つぶやいたり、クイズを出したりすることもあり、児童生徒のメンタルケアに役立った。

「質問タイム」: 授業内ではなかなか質問しづらい子もいるため、分からない部分を自由に聞ける時間を設定した。質問したい児童生徒は Zoom に入室し、教師に質問をしていた。

「お話タイム」: 担任と児童生徒のつながりを作るため、zoom で担任と児童生徒が一对一で気軽に話せる時間を設定した。



7. 取組の成果

(※どのような課題をどのように解決したかや、生徒・児童への効果等について詳細に記載し、成果物があれば添付してください。また成果がどのような観点で他の学校の参考になるかも記載してください。)

・classroom を活用してプリントや動画の課題配信をすぐに行うことができた。さらに WiFi の増強や大型モニターの増設、カメラやヘッドセットの充実によって、オンライン授業の内容が進化した。zoom 授業では教師からの説明だけでなく、教師と児童生徒、児童生徒同士の双方向の交流もできた。そのため、児童生徒の学習を止めることなく、質の高い学習を保障することができた。

・オンライン学習によって、休校中も児童生徒が学習に向かうきっかけとなった。保護者アンケートの結果でも、小学部約93%、中学部約84%が肯定的な回答である。

・classroom で課題の管理・提出物の管理が容易にでき、児童生徒一人ひとりの学びや成長を把握して評価す

ることができる。

・年度後半には反転学習を取り入れた。プリントや資料、動画を授業の前日に配信することで、基礎知識を家庭で身に付けられるようにした。その基礎知識を使って、授業で交流をしたり、より深い学習をしたりすることができた。

・児童生徒の「オンラインでもできる児童委員会・生徒会活動をしたい」という声をもとに、児童生徒が主体的に取り組むことができた。

8. 今後の課題・展望

(※次年度以降への継続性及び発展性に言及してください。)

【課題】

・画面を長時間見ることによる目の疲れ、視力低下の懸念。

・知識及び技能の見取りが難しい。適切・公平なテストの実施方法を検討する必要がある。

・保護者アンケートの結果にもあるように、基礎学力をしっかり定着させるための手立てが必要。

・オンライン授業では、隣の席の人と少し話し合うというような交流がスムーズにできない。交流する場合はブレイクアウトセッションを使って少人数で行うことが多い。

・課題配信、zoom 授業、反転学習は、ある程度児童生徒の意欲があることが前提となる。提出しない、出席しない、事前配信を見ないなど、学習意欲が低い児童生徒への支援、意欲付けが重要である。

【今後に向けて】

・オンライン学習中は教科担任制にしていたことで、複数の教員で学年全体の児童生徒を指導した。そのため、複数の教員での児童生徒理解が進んだとともに、課題作成も効率的であった。文科省では 2022 年度から小学校高学年で教科担任制を導入予定であることから、一部教科担任制・専科指導の継続をしたい。

・学校と家庭のデバイス状況も重要である。本校は ipad や chromebook がたくさんあり、授業で使うほかにも、休校中の貸し出しにも対応できた。各家庭で学習する際、一人一台のデバイスがあること、しかもある程度画面の大きなものが必要である。

・5年程度後には、タブレットなどの更新時期が来ると考えられる。本校中学部は来年度から個人持ちとするが、小学部も個人持ちとしていく必要がある。

9. 所感

長期間の休校時にも、児童生徒の学びを止めることなく質の高い教育を保障するために、オンライン学習の充実を図ってきた。この取り組みは、現在の世界の大きな変化に対応したものである。子どもたちに生きる力を育むことと同様、我々教師も変化の激しい世の中に対応する力が求められている。来年度は今年度の成果を活かしてさらに進化させるとともに、見えた課題を解決すべく取り組んでいきたい。また、この取り組みが実践校だけでなく、日本国内の多くの学校へ広まり、各校の取り組みとしてさらに進化させていくことを期待している。

※提出いただいた報告書や成果物は、本事業の取組成果として公開する予定です。また、記載いただいた内容は文部科学省や海外子女教育振興財団のその他の資料にも使わせていただく可能性があります。

※記入欄は適宜拡張してください。